
アンチノーマル

4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンチノーマル

【Nコード】

N4086F

【作者名】

4

【あらすじ】

中学生二人、二重人格、王女と他諸々が繰り広げる魂と色々な物語

第一話「選ぶ者、選ばれる者」(前書き)

(名前) はその人視点です

第一話「選ぶ者、選ばれる者」

第一話「選ぶ者、選ばれる者」

(空)

俺の名前は、西荻空、今、皆さんも多分経験したと思われるかなりウザイ状況にいます。

「なに、この点数？」

俺のテストを片手に聞く母

「あゝ悪かったよ！」

うるさいなゝ

「悪かったじゃないわよ、自分のことですよ！」
ウザイって

「わゝかってるて」

「分かってないから言ってるんじゃない！」

あゝウザイウザイウザイウザイ

「分かったからどっか行つててよ！」

「宿題は？」

またこいつは

「今からやるって」

「じゃあ今すぐやりなさい」

はいはい

ドタンッ

無言で部屋を出る母・・・

「死ねよ」

独り言

さて、言っちゃったし勉強するか・・・
教科書とノートを手にも机に向かう俺・・・

ただ、時間だけが過ぎていく
それだけ

問題？

解く気も起きない

勉強して損することは無い
誰かが言ってた。
そんなのウソだね

頭良いやつがいるから、
戦争が起こった。

頭良いやつがいるから、
騙されるやつがいる。

頭良いやつがいると、
周りが損する。

だから俺は、平凡でいい

「そろそろ寝るか・・・」

- あなた、寂しい人ね -

「!？」

なんだこの声？

「誰だ？」

- あなたは選ばれた -

「はあ？」

- 私の名は・・・ -

「聞こえねえよ！」

それを最後に、声は途絶えた。

「なんだ、俺おかしくなったのか？」

早く寝よう・・・

目を閉じ心を落ち着かせる

そしてだんだん体の感覚が無くなっていく

- やっぱり起きてると対話しづらいわね -
またか

- またかとは何よ -
あんた誰なんだよ？

- 私は・・・ -

なんだよ、聞こえねえよ

- やっぱり契約手続き無しで解名は駄目なのかな・・・
意味わかんねえよ！

大体なんだよ選ばれたって

- 私の所有者が死に、あなたは偶然次の所有者になった -
なつてねえよ！

それに何で俺なんだよ

- 知らないわよ大体言っただじゃない 偶然 だって -
偶然？

- 私に選ぶ権利なんて無いそれより今何年？ -
あ？

今は2008年だけど

- ...そうありがと -
で、何なんだよ選ぶ選ばれるって

- 詳しく知るには私と契約しなきゃいけないの -
契約？

何の？

- 魂の契約 -
魂の契約？

- あなたさつきから聞いてばかりね -
うるせー

わかんねーに決まってるんだろ

・簡単に言ってあなたの魂の十分の一に私の魂を埋め込むの
じゃあやめとく

・そう、じゃあ力が必要になったらいつでも呼んで
おい、名前もわかんねえのにどう呼べと？

・・・声が途絶えた

何だっ たんだ？

「ふあゝあ」

もう朝か

変な夢だっ たな

さて、用意も出来たし学校行くか・・・

「いつてきます」

「いつてらっ しゃい」

学校までは歩いて10分くらいの所にある、
さつき家で時計を見た時はまだ20分ほど余裕があった

「契約かゝ」

一体何だっ たんだろ

あの夢、何かおかしい

「よっ！」

不意に声をかけられる

「なんだお前か」

俺の目の前に立っている、少し髪の長い男、
名前は風間龍、こいつとはいわゆる腐れ縁ってやつだ
幼稚園から一緒に、

かなり器用なヤツだ、基本なんでも出来る、
人のプライドを壊す名人、

この前なんか体育の授業で野球の試合やったら、
現役野球部のピッチャーの球を、校舎まで運んでくれた。

「なんだとはなんだ」

「うるせーお前の顔は見飽きたんだよ」
まったく

「お、言ってくれるじゃん」

「何度でも言ってる、お前の顔は見飽きたんだよ」
へっ

「そこまで言うか、ならこっちにも考えがある」
またこれか

「俺、お前より先に学校行くわ」
とだけ言って走り出す龍

「またこれか」
すかさず俺も走る

別に俺が走らなくてもいいんだが
なんか負けた気がするから走る

「遅いぞ、空、もっとペース上げろよ」
チッ

「やってやろうじゃん」
一気にペースを上げる
やがて校門が見え始める

「校門までな」
なんとなく分かるって

段々と近づいて見える校門
そして

「うおおおおお！」「うらあああああ！」
.....

「ゴール！」

あゝあまた負けた

「また俺の勝ちだな、空」
「チッ」

これだから、こいつは.....

第二話「退屈」（前書き）

今回は人生に退屈する少年、風間龍の話です

第二話「退屈」

第二話「退屈」

(龍)

満遍なく広がる青空、きれいな青空、今、俺達は学校の屋上、つまり禁止ゾーンにいる

「あゝ退屈だあ」

思わず感情が声に出る

「何が？」

すかさず空が尋ねてきた。

「全部、なんでこんなにつまんねえんだろ？」
まったく

「つまんねえと思うからだろ」
だよな

- あゝあなんか事件でも起きねえかな -
心の中でそつと呟く。

「お前等、そんな所で何してる!？」
「ヤベえ国語のゴリ松だ。」

「お前等なあ何回言ったら分かる?」
起きたな事件、つまんないけど

「10000回」「10000回」

ハモった？

いや、俺の0が一個多い

「ほゝ生意気な事を……」

ヤベ、マジモードすか……

「逃げるぞ、空！」

「勝手に仕切んな！」

一斉に二手に分かれて、校舎の入り口まで猛ダッシュ！

「逃がすか！」

すかさず入り口へ向かうゴリ松。

ヨシッ！

何とか間に合った、そして階段をさつさと飛び降りながら一階を目指す、幸い今は昼休み、外に出ても何の問題も無い。

「ふゝもう追って来ねえな」

あぶねえあぶねえ

「全く、いい加減にしろよな、ケツの青いゴリラめ
ここまで言う？」

「そついや、なんで今日そんな苛々してんだよ？」
さつきから気になってたんだけど

「なんで分かった？」

長い付き合いだからな、気付かないほうが難しい。

「なんとなく」

面倒臭いので適当に流す

「いやな、変な夢見てな」
は？

「夢？」

「ああ」

その何処に苛立つ要素が？

「どんな？」

一応聞いてみる。

「いや、言うのは止めとく」
なんだよ

「なんで」

「何でもいいだろ」

そう言つて、空は校舎に入つていった。

「全く、頑固なヤツ」

また口から出る。

・キンコーンカーンコーン・
チャイムが鳴る

教室戻るか・・・

教室に戻った後、授業と掃除を適当に済ませた俺は、やる事も無いので帰ることにした。

暇だ・・・

この世界は何でこつても退屈なんだ。

確かに、学校は楽しい、でもそれは小さな楽しみだ。

「なんか面白い事ねえかな」

また口から出る。

悪い癖だ。

「!？」

なんだ？

何か、来る！

何だ？この感覚、何か感じる。

何かは分からない、何かが

そして、

有り得ない速さで、何かが横切る、

一瞬・・・

俺の目には、見覚えのある姿が映った様に見えた。

「そ、空？」

第二話「退屈」（後書き）

まあこれからもボチボチ書いていきますわ

第三話「契約」

第三話「契約」

(空)

放課後、俺は学校帰り、またあの夢のことを考えていた。

「話してたら大笑いされてたな・・・」
詳しく話さなくて良かった。

大体あの声、夢の中で聞こえた声を信じろと？
ばかばかしい、たかが夢だ。

- まったく、あなたって何も信じないのね。 -

「うわっ!？」

いきなり聞こえた声に奇声を発する俺。

- うわっとは何よ、うわっとは -

「うそだろ、俺頭おかしくなったのか？」
激しく混乱

- 何処もおかしくないわよ、ただあなた以外には聞こえない声が聞こえるだけ -

「それがおかしいんだって！」

- あなたはおかしくない、それだけは分かって -

「じゃあなんで声が聞こえんだよ」

・だから選ばれたって言ってるじゃない・

「何に？」

これが気になる

・私にも分からない・
は？

「じゃあ何でわかんだよ」

・分かるから・

「理由になってねえ」

・分かんないわよ、私にだって、ソウルメイトが人に宿る理由なんて！・

「ソウルメイト？」

よく分からない単語が出てきて困惑する俺。

・そうよ、それが私達の呼び名・
達？

「あんただけじゃないのか？」

これは驚く

・そうよ、でもあなたは特別、こつちの世界で目覚めた・
こつちの世界？

「こつち？」

・そう、世界は二つに分かれてる、この世界ともう一つの世界・

「信じていいのか？」

「私はあつちの世界の存在」

「じゃあ何で？」

「知らないわよ、私だって、いきなりこっちで目覚めてわけ分かんないのよ！」

「怒りっぽいな……」
「まったく……」

「うるさい！」

怒られた。

と姿の無いやつと口論していると……
ズズズ……

何かが動く音がした、そして振り向くと。

坂道から車が猛スピードでバックしている。
エンジンはかかってない。

「あの車サイドブレーキが壊れてる」

そして目の前には……

「おばあさん！？」

しかも盲目の人が使う、杖的な物を持つてる。

「どうして避けないのかしら？」

「あの人、見てない」

やばい

どうする俺？

「・・・おい」

やっぱあれしか思いつかねえ

- なに? -

「契約したら、あの人助けられるか?」

- 多分 -

- するの? -

「聞かなくてもわかんたら」

- ブツブツ・・・ -

何て言ってんだろ?

そして次の瞬間・・・

目の前が真っ暗になる、そこには、古い木の扉と、一人の女が立っていた。

「ここから先に行ったら、あなたが辛い思いをするかもしれないわよ」

この声、あの声の持ち主か・・・

「目の前でそんなグロイ物見たくねえんだよ」

「本当に、いいのね?」

彼女が不安そうに訪ねてくる。

「人が死ぬの見るよりましだ」

「そう・・・」

「んじゃ、俺行くぞ」

扉のノブに手をかける

「ええ」

そして、扉が開く・・・

じわじわとおばあさんに近づく車。

大丈夫、どうすればいいかは分かってる。

- いいわね -

「いつでも」

- 行くわよ -

その瞬間、風が俺に向け、流れてくるのが分かった。

風に包まれた俺は、心に刻まれた名を呼ぶ。

「来い、風華^{ふうか}」

さつきまで、俺に向け流れていた風が、止む。

ふと気が付くと、俺の手には、一振りの刀が握られていた。

「で、これからどうしろって？」

- 今は、説明してる場合なの？ -

わかんねえよ、名前が分かっただけで。

- 走ってみて -

は？

「なんで？」

- いいから -

試しに足を振りかざし踏み込む。

シュン・・・

は？

何この速さ？

「無理無理無理無理！」

走ったら止まれなくなるって！

- 今はそんな事言ってる場合？ -

こんな会話をしてるうちに、車はおばあさんの目の前に。

「ヤバイ！」

気が付くと走っていた、

おばあさんは、助けられた。

・・・だけど

「止まれねえ！」

おかしいな速さで走り続ける俺。

- まったく、先が思いやられる -

これが、俺と異世界の奇妙な物語の始まり。

第三話「契約」（後書き）

とうとう始まりました、空の物語、
まあ期待せずに次話をお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4086f/>

アンチノーマル

2011年1月23日20時13分発行